

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520019

研究課題名(和文) 形而上学史再構築のための基礎的研究 カント《Opus postumum》への道

研究課題名(英文) A preliminal study for the reconstruction of the history of metaphysics--the road to Kan's Opus postumum

研究代表者

福谷 茂 (Fukutani, Shigeru)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30144306

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：我が国に未だ翻訳も存在していないカントの(遺稿)がもつ哲学史的意義を解明するため、特にスピノザとの関係を重視すべきであることを解明して論文として発表した。さらに研究遂行の過程で「ヘノロジー」という新しい研究概念がカント哲学の形而上学史上の位置の解明のために有効であることを主張し、研究はヘノロジー概念を用いて近世哲学史像の見直しが図られるべきであることへと発展した。

研究成果の概要(英文)：I have clarified that it is utmost important to grasp the connection between Kant and Spinoza to understand the meaning of Kant's Opus postumum. Furthermore I emphasized the relevance of the concept of henology to make clear the place Kant had in the history of metaphysics. Concluding results show that we must revise our view of the history of modern philosophy by full uses of the concept of henology.

研究分野：カント哲学

キーワード：カント 形而上学 近世哲学史 ヘノロジー

1. 研究開始当初の背景

カント研究上の盲点となっている『遺稿 (Opus postumum)』に関する基礎的研究を行う傍ら、形而上学史の再編成に取り組むことが研究開始当初の背景である。『遺稿 (Opus postumum)』は膨大な分量を持ち、しかも内容的には完成度の高い部分を含んでいて公刊著作に準ずる位置が与えられるべきであるにもかかわらず、世界的にみても研究業績が乏しく、従来出版された理想社および岩波書店の『カント全集』にも収められていない。応募者は久しく『遺稿 (Opus postumum)』研究に取り組んできたが、従来の研究の停滞はそもそもこのテキスト群を読み解くための観点そのものが欠落していたことに求められることを確信するにいたった。そして『遺稿 (Opus postumum)』と『純粹理性批判』との対応関係に着目して『遺稿 (Opus postumum)』核心部を読み解くカギは形而上学にあるという判断を固めた。

2. 研究の目的

『遺稿 (Opus postumum)』が含む形而上学的内容を解明して、カント哲学の史的意義を新しく確定する。本研究のねらいは、カントの『遺稿 (Opus postumum)』の翻訳および解説の作業を基礎として、西洋哲学史像の変貌の契機を与えることにある。より具体的には、『遺稿』においてカントが批判哲学の成果を踏まえて形而上学を体系的に叙述しようとした試みを、新プラトン主義に由来するタイプの形而上学の再興として解明することをめざしている。

形而上学史における「ヘノロジー」(一者論)の厳存を浮き彫りにして、従来の哲学史記述においてその片隅に追いやられ、あるいはその裏に隠蔽されてきた新プラトン主義に改めて光を当てるのが狙いである。このようにして形而上学史における真の主演として新プラトン主義の系譜をクローズアップする観点から、カントの『遺稿』を同じ系譜の中に位置付け、やがては古代・中世にも及ぶべき哲学史像の再編成に先鞭をつけることを意図している。

3. 研究の方法

アカデミー版カント全集所収の本文に基づき、『遺稿 (Opus postumum)』の試訳と研究と試みる。

本研究の柱は二つある。一つは形而上学史の再構築、すなわち新しい哲学史の可能性の探求であり、この探求は「ヘノロジー」という言葉をキーワードとしている。もう一本の柱は、カント《Opus postumum》の研究である。

研究の前半は、いま述べた第一のねらいである哲学史の新しい概念を鑄造する作業が中心となった。その際、主としてその方面で踏まえらるべき国外文献の収集と咀嚼が

課題となったのは当然である。レアーレやクルバリツィスやバイアーヴァルテスの研究成果に焦点が合わせられてこの作業は遂行された。

さらに研究の後半は、第二の柱である《Opus postumum》の徹底した研究に充てられた。これは現在邦訳決定版として通用している岩波版『カント全集』に全く収められなかったテキストであり、我が国カント研究史上においてネグレクトされてきたものである。なによりも正確な翻訳が提供される必要がある。標準的訳文として使用可能なものを提供することをめざした。のみならず内外の従来の解釈はどれもわれわれがこれこそが要点だと考える点に関してはフォーカスすることができずにいるという実状もあるので、膨大なテキスト群からの重要個所の選択もまた英語フランス語イタリア語スペイン語への先行訳を照らし合わせたうえであくまでも独自に行わねばならなかった。

『遺稿 (Opus postumum)』に関しては2015年の国際カント学会における研究代表者の情報収集により現在新しく本文校訂をやり直す作業がドイツで進行中であり、その結果が公刊された時点で現行のアカデミー版カント全集に基づく訳文および研究は再検討される必要があることが判明した。これは本研究の問題意識が世界的な問題意識の展開とシンクロナイズしていたことを示すものであった。しかしながらわれわれが考えるようなヘノロジーの観点を活用するような研究動向はいまだ全く見出すことができない。

4. 研究成果

『遺稿 (Opus postumum)』の形而上学的内容の掘り下げにより、カントにとどまらず、近世哲学史全体に対する新しい観点が得られた。

すなわち、われわれの提起するヘノロジーの観点の導入により、カントの主著である『純粹理性批判』の核心部「カテゴリーの超越論的演繹」の解釈のために『遺稿 (Opus postumum)』を活用することができることが明らかにされた。このような連関の発掘によりカント解釈上の難所として遇されてきた「カテゴリーの超越論的演繹」は単に特殊な一問題であるだけでなく、西洋形而上学史上にカントの貢献を重く位置付けることが許される哲学史上の檜舞台ともいえるようになった。これは『純粹理性批判』を中心とする通常のカント研究において直ちに活用することができる成果である。

同時にこのことは近世哲学史の抜本的な見直しを要求し、それはライプニッツおよびスピノザにおけるヘノロジカルな構造の抽出という課題及びその点の解決のために着手点の確定という研究成果を生み出した。

スピノザに関してはカントとの関係が従来からも指摘されつつも、表面に現れたカントのスピノザに対するネガティブな発言を手がかりとする限りにおいては積極的な成果が出にくい事情があった。これに対してヘノロジーによって『遺稿 (Opus postumum)』と『純粹理性批判』とを一体化するわれわれの方法はヘノロジカルな構造の論理という点においてスピノザとカントとを連関させることを可能にした。ドイツ観念論において課題とされたスピノザの実体を「精神」化するという方策はドイツ観念論に先立ってカント自身においてもまた独自の方法によって試みられ達成されていたのである。

同時にまたこのようなスピノザとカントとの連関性はカント解釈の別の分野にも波及効果を生んだ。つまりカントの『判断力批判』とスピノザとの関係という新しい着眼点を招き寄せた。スピノザ『エティカ』第5部と『判断力批判』とはやはりヘノロジーによってブリッジされることが可能であり、しかもそれは近世哲学がヘノロジーそのものためにたいしてどのような新しい寄与をおこなったかという未開拓の観点にも示唆する点が甚大だったのである。これは、近世哲学にヘノロジーが伏流しているというだけではなく、ヘノロジーに対して近世哲学は新しい貢献をなした、しかもそれは近世哲学の主要なテクストといえるものを舞台にしていた、ということにほかならない。これはわれわれにとっては大きな成果だったと考える。

この点はさらにライプニッツに対する新解釈に展開されざるをえないものであり、ライプニッツの創造論という従来あまり中心には置かれなかったテーマに関して研究を公にした。創造に関して働く二つの意志に関してヘノロジーが作用しており、ライプニッツの弁神論の核心はヘノロジーの論理であるという主張として具体化された。またスピノザとライプニッツとの関係付けも『エティカ』第5部を拠点として行う道があることが明らかとなった。

のみならず遡って近世哲学の発端に位置するデカルトにおいてもヘノロジー的構造を見出すことができる、という成果を研究の最終段階で得ることができた。これは「神の誠実」ならびに永遠真理創造説という従来のデカルト解釈で認められてきた真理論以外に第三の基礎が見いだされたということに他ならない。この点はデカルトの『精神指導の規則』に関する新しい研究視点を生み出した。このテクストをカント『純粹理性批判』の「超越論的弁証論」と連携させることができるということは本科研の生み出したカント研究に対するもっとも斬新な寄与ではないかと考えられる。しかもこれは同時にデカルトの「コーギト」に対して正当な位置づけを与えるものである、という点においてデカルトからカントへという西洋近世哲学史の王道において働いていた論理は何であり、

それはどこに由来するか、という問題の解決への見通しを与えるものだと考えている。

『遺稿 (Opus postumum)』を出発点とするこのようなヘノロジーの観点はさらにまた日本哲学においても適用可能であることがわれわれの研究成果には含まれている。田邊元は傑出したカント研究者でもあり、西田幾多郎に対する批判には田邊がカント研究者であったことが大きく作用している。田邊がカント研究に始まりヘーゲル研究を経て到達した「種の論理」にはカントの超越論的図式論をベースにした世界図式論が含まれており、カント図式論がヘノロジカルであるという意味において田邊の「種の論理」および「絶対媒介」の思想はヘノロジーの論理が日本哲学史として新しい展開を求めたものだという意義を認めることができる。特に西田と田邊との関係の実相に関してヘノロジーの観点をを用いた分析により非常に明快な整理を与えることができた。西田の「絶対無の場所」はヘノロジーを受け止め前進させたものであるが、田邊の西田批判は巷間時に言われるような誤解ではなく、絶対無の場所をいわば「受肉」させたものとしてヘノロジー形而上学の歴史においても高い評価を与えられるべきものである。

のみならず、「種の論理」をめぐる田邊と高橋里美、務台理作の間に行われた論争をやはり日本で展開されたヘノロジーの諸相として位置づけることが可能である。ヘノロジーの受容と展開のために「絶対無」がなぜ必要とされたのか、そして「絶対無の場所の弁証法」という形態においてヘノロジーの何が新しく明らかになったのか、この二点を集約的に考えることができた。これによって日本哲学史を西洋哲学の移入ないし摂取としてではなく、むしろ西洋哲学史そのものの日本における展開としてもまたとらえられるというパラダイムを得ることができた。

かたわら、ヘノロジーのモニズムとしての一面との関係において19世紀の最終局面においておこなわれた「プリティッシュ・アイディアリズム」の代表者ブラッドレーとアメリカのプラグマティズムを代表するジェームズとの論争もまたプルラリズム対モニズムという点においてヘノロジーにかかわるものとしてとらえなおすという新視点も得られた。これはわれわれのヘノロジー哲学史観をヨーロッパ大陸と日本だけでなく英米にも及ぼしていくという新しい課題を獲得しえたことになる。

以上のような豊饒な成果を得ることができたことはカントの『遺稿 (Opus postumum)』というテクスト群が持つ哲学史および哲学史的ポテンシャルの巨大さを十二分に示すものだと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

福谷茂、「形而上学としての人間学 - カントにおける別の一つの形而上学への途 - 」、『哲学論集』第 40 号、2011 年、pp.47-61、査読なし

福谷茂、「因果・時間・空間 カント第 2 類推について 」、『哲学論叢』第 38 号、2011 年、pp. 1-10、査読有

福谷茂、「歴史・時間・事実 哲学史研究のための予備的考察 」、『近世哲学研究』第 15 号、2012 年、pp.24-45、査読有

福谷茂、「田邊元とカント 絶対弁証法から『種の論理』への論理 」、『求真』第 18 号、2012 年、pp. 1-13、査読なし

福谷茂、「ヘノロジカル・カント 」、『日本カント研究 13 カントと形而上学』、2012 年、pp.2-20、査読なし

福谷茂、「ライプニッツの創造論(二) 」、『近世哲学研究』第 17 号、2013 年、pp.34-55、査読有

福谷茂、「カントとハイデガー-近世哲学におけるヘノロジーの系譜- 」、『Heidegger-Forum』第 8 巻、2014 年、pp.141-147、査読なし

福谷茂、「カント『遺稿』におけるスピノザ 『カントにおけるスピノザ問題』への寄与として 」、『思想』第 1080 号、2014 年、pp.169-179、査読なし

福谷茂、「カントの誤謬論 一 」、『哲学研究』第 598 号、2014 年、pp.1-17、査読有

〔招待講演〕(計 2 件)

Fukutani Shigeru, Henological Kant, International Kant-Congress, 2015 年 9 月 24 日、University of Vienna

福谷茂、「田邊元の二つの弁証法 絶対弁証法と『種の論理』 」、西田・田邊記念講演会、2015 年 6 月 6 日、京都大学

〔その他〕

ホームページ

<http://modephil.ivory.ne.jp/>

福谷 茂 (FUKUTANI, Shigeru)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30144306

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者